

ヘルスリテラシーを処方箋に

がん社会 を診る

中川 恵一

「がん社会」は私の造語で、働くがん患者が増える社会を意味します。

社会が成熟すれば、洋の東西を問わず、高齢化と少子化が進みます。欧米と違い、若い移民などを積極的に受け入れてこなかった日本では、高齢者が働く必要があります。そして、がんは一種の老化といえる病気ですから、働くがん患者が増えます。

例えば日本人男性の場合、55歳までのがんを罹患（り）する確率は5%もありま

せん。しかし65歳、75歳、85歳までのがんを発症する確率は13%、32%、53%と、急激に上昇します（生涯では65・5%、つまり3人に2人）。

今、60代後半の就業率は50%を超え、60代の過半数が「70歳を過ぎて働く」と答えています。がん社会はこの国にとって、当然の帰結といえるでしょう。

日本の高齢者は長く働ける「若さ」を保っていることも重要なポイントです。

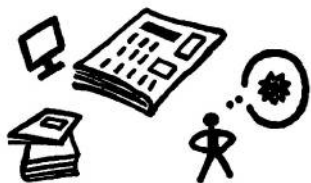


イラスト 中村 久美

卑近な例ですが「サザエさん」のお父さんの磯野波平氏は54歳の現役サラリーマンです。漫画の連載が始まった終戦間もない1946年当時の日本人が今よりずっと「老けていた」ことが分かります。

日本老年学会と日本老年医学会も、歩く速さや歯の数、知力のほか、健康状態も「現在の高齢者は10〜20年前に比べて5〜10歳は若返っている」と評価しています。

両学会は、高齢者の定義を「65歳以上」から「75歳以上」とし、65〜74歳を「准高齢者」、90歳以上を「超高齢者」という形で区分すべきだと提言しています。

確かに現代日本の高齢者は働かなければいけませんし、また、働くことができるだけの体力を持っているといえるでしょう。しかし注意が必要なのは、がんのリスクは生活

習慣などが同じなら、遺伝子の劣化時間、つまり年齢で決まるということですが、どんなに見た目が若々しく、体力があっても、同じ年齢であれば、今も昔も、同じ確率でがんを発症するわけです。

それでは、高齢まで長く働く日本人に向けた「処方箋」を提案したいと思います。

それは「がんを知ること」、さらに広くいうならば、「ヘルスリテラシー」を高めることです。

この世には、発症原因も分からなければ治療法も存在しない「難病」もたくさんあります。その点、がんはヘルスリテラシーを高めることで、ある程度「コントロール可能」な病気です。

学校でのがん教育が始まったことはエポックメイキングですが、大人のがん教育が大きな課題です。手前味噌ですが、このコラムを毎週お読みいただくこと。このことを強くお勧めしたいと思います。

（東京大学特任教授）